

アナンシと五

20141214/v. 1. 2

<二人操作版>

| 1

■ 人形 ■

- ・アナンシ
- ・ウサギ
- ・アヒル
- ・ハト
- ・魔女

■ 大道具 ■

- ・窓のある魔女の家
- ・サツマイモの山（5つ）

■ 小道具 ■

- ・大鍋

■ プロローグ ■

語り 「むかーし…あるところにアナンシという化け物がいていつもお腹をすかせていました…[アナンシを出し]これがアナンシ…アナンシがいるところの近くに[片手を広げてみせて]五…という名前の魔女が住んでいました…魔女は自分の五…という名前が大嫌いで もっといい名前でももらいたいと思っているのに みんなはやっぱり五…というものだから 五はいつも腹を立てていました…



■ 魔女の家 ■

語り 「ある朝 アナンシが魔女の家をのぞいてみると[アナンシを窓からのぞかせながら]家の中では魔女が大なべで魔法の草を煮ているところでした…なべから煙があがりだすと魔女は魔法の杖を振り上げて恐ろしい呪文を唱えました…[この間魔女は呪いをかけている]」



魔女 「五という言葉も唱えたものはその場で死んでしまえ…そ

の場に倒れて息が絶えてしまえーっ…」

アナンシ「いい事を聞いた…いいことを聞いた…魔女のやつ…だれでも[5のプレートを出して]この数字を口にしたものはその場で死んでしまう呪いをかけたな…これを使えばたらふくご馳走にありつけるぞ…さあ準備準備…と[と下手に去る]」

12

■ 道端 ■

アナンシ「[下手からサツマイモの山を引きづりながら登場]さあ…こいつを使えばきつとうまくいくぞ…[と間隔を開けて山を五つ作る]ここにあるのはサツマイモの山だ…いくつあるかという…[と数えながら]ひとつ…ふた一つ…み一つ…よ一つ…[少し間をとって]次は言わないよ…いったらお終いだ…この山を最後まで数えたやつは呪いにかかるんだからな…そうしたらおれがいただくのだ…良い考えだねえ…さあ獲物が来るのが楽しみ楽しみ…おや…向こうからお尻を振りながらアヒルがやってきたぞ…[アヒルが上手から登場]

アナンシ「おはよう アヒルさん ごきげんいかがですか」

アヒル 「おはよう…おかげさまで…あなたは？」

アナンシ「ええ…それがねえ…「ご覧の通りサツマイモを作ったんですがね…頭がわるいもんで いく山とれたか 数えられないんですよ…[と山を数えながら]一…二…このあとがダメなんです…すみませんが ご親切なアヒルさん…ひとつ数えてみてくれませんか？」

アヒル 「いいですとも[上手からゆっくり下手にいるアナンシに向かって一山づつ確認しながら数える]一…二…三…四…五…バツタリ[倒れる]」



アナンシ「…いただきまーす…パッキリ[と丸呑みする]さーて…ア
 ヒルぐらい食べもまだまだお腹がすいているぞ…もっと
 大きな獲物がこないかなあ…[と上手を見て]おっ…来た
 ぞ来たぞ…アヒルより大きな獲物が…ウサギだ…長い耳
 をパタパタさせながら歩いてきたぞ…[上手からウサギ登
 場]」

アナンシ「おはよう ウサギさん ごきげんいかがですか」

ウサギ 「ありがとう おかげさまで…あなたはいかが？」

アナンシ「ええ…それがねえ…ご覧の通りサツマイモを作ったんで
 すがね…頭がわるいもんで いく山とれたか 数えられ
 ないんですよ…一…二…ここまではいいんですが、その後
 はたくさん…になっちゃうんで…すみませんが 数えて
 みてくれませんか」

ウサギ 「いいですともお安いご用…この山を数えればいいのね
 [上手から順に下手にいるアナンシに向かってゆっくり一
 山づつ確認しながら数える]一…二…三…四…五…バッタ
 リ[倒れる]」

アナンシ「いただきますパッキン[と丸呑みする]…ほんとに魔女の
 呪いはたいしたもんだな…さーて…ウサギでだいぶお腹
 がふくれたが、もうちょっと食べたいな…小さい獲物でい
 いんだが…[と上手を見る]おおっ…来たぞ来たぞ…ちょ
 うどいいのが…やってきたぞ…ハトだ[上手からハト登
 場]」

アナンシ「おはよう ハトさん ごきげんいかがですか」

ハト 「ありがとうアナンシさん…ごきげんいかが？」

アナンシ「ええ…それがねえ…ご覧の通りサツマイモを作ったんで
 すがね…頭がわるいもんで いく山とれたか 数えられ
 ないんですよ…すみませんが 数えてみてくれませんか」



ハト 「あら… [からかうように] アナンシさんなら数えられる
 でしょう？」

アナンシ「それがからっきしで…いいですか…一…二…それからた
 くさ一ん…こうなっちゃうんですよ」

| 4

ハト 「わかりましたやってみましょうねえ…[と上手のサツマ
 イモの山に飛び乗りアナンシに向かって山から山へ移り
 ながら数える]一…二…三…四… [挑発するように] **それ
 からわたしの乗っている分**」

アナンシ「えーっ？ハトさん…あんたの数え方はおかしいですよ…」

ハト 「まあ ごめんなさいアナンシさん それじゃもう一回…
 [とこんどは反対側へ飛び移りながら数える]一…二…三
 …四… [挑発するように] **それからわたしの踏んでいる分**」

アナンシ「違う違う…そんな数え方じゃだめだー…」

ハト 「ほんとうに ごめんなさいアナンシさん 今度こそもう
 一回…[とまた反対側へ飛び移りながら数える]一…二…
 三…四… [挑発するように] **それからわたしのすわってい
 る分**」

アナンシ「「なんてばかなハトだ なんて間抜けなハトだ いいか
 …サツマイモの山はこうやって数えるもんだ…いいかあ
 …一…二…三…四…五 [バッタリ]」

■ エピローグ ■

語り 「五といったとたん アナンシはバッタリ倒れて死んでし
 まいました…[ハトがサツマイモの山を飛び移るたびに
 お・し・ま・い…の文字が一つずつ現れる…そして最後の
 山に乗ったところで魔女に変身?」



演出ノート

- 二人操作のテーブルパペット用台本としてアレンジした
- 一人がアナンスと語り（大道具操作を含む）もう一人が魔女・アヒル・ウサギ・ハトを演じる
- 魔女のシーンは真剣に演じた方が良いが、アナンスと動物たちのやり取りは軽く演じたい
- 特に呪いにかかって死ぬところと食べるところはサラッと進行させたい

15